

古都奈良の文化財の SDGs 教材開発に関する研究

中澤静男

(奈良教育大学 ESD・SDGs センター)

Research on Development of SDGs Teaching Materials for Cultural Properties of Ancient Nara

Shizuo NAKAZAWA

(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)

要旨：本稿は、2021年5月31日に策定された「我が国における「持続可能な開発のための教育（ESD）」に関する実施計画」（第2期 ESD 国内実施計画）、及び改訂された学習指導要領に即して、奈良への修学旅行を SDGs を学ぶ旅に変革することを目的とした研究である。SDGs の達成に貢献できる人を育てるのが ESD であり、ESD は学習者の社会づくりに関する価値観と行動の変革を促す教育である。そこで、古都奈良の文化財の8つの構成資産に ESD で育てたい価値観との関係性を調べたところ、すべての構成資産に何らかの ESD で育てたい価値観が内包されていることが明らかになった。次に GAP で示された4つの視点との関係性を調べたところ、8つの構成資産のうち、興福寺及び継承されなかった資産である平城宮跡以外の6つの構成資産に市民一人一人の行動変容が認められたことから、4つの視点の中でも、特に市民一人一人の行動変容が持続可能な社会づくりに必要であることが明らかになり、この2つの条件から東大寺大仏に関わる盧舎那仏造頭の詔と市民の対応、東大寺の修二会及び唐招提寺の鑑真の渡来、覚盛とうちわまき、釈迦如来立像の胎内文書に関わるエピソードが、SDGs 教材として重要であることが明らかになった。そして児童生徒の記憶に残りやすい修学旅行の学習内容として奈良 SDGs 学び旅を提案した。

キーワード：持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development

持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals

古都奈良の文化財 Cultural properties of ancient Nara

1. はじめに

2017年3月に告示された学習指導要領には前文が付されており、「持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と明記された。また、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領、特別支援学校教育要領の総則においても、同様の言葉が記されている。持続可能な社会の創り手を育てる教育が持続可能な開発のための教育（以下、ESD）であり、これまでユネスコスクールと呼ばれる学校で先進的に取り組まれていたが、今後は、日本中のすべての学校で ESD の理念を基盤とした教育が展開されていくこととなった。

一方、様々な課題を抱える現代社会において、持続可能な社会の実現のために行動する重要性は一層高まっているとして、持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議において、2021年5月31日に「我が国における「持続可能な開発のための教育（ESD）」に関する実施計画」（第2期 ESD 国内実施計画）が策定された。これは、2005年から2014年までの「国連持続可能な開発のための教育の10年」（DESD）の後継として2015年から開始された「持続可能な開発のための教

育に関するグローバル・アクション・プログラム」（GAP）を踏まえたものである。GAP においては、一人一人の考え方や行動の「変容」の実現に向けて教育が果たすべき役割が再確認され、5つの優先行動分野として①政策的支援、②機関包括型アプローチ、③教育者、④ユース、⑤地域コミュニティを定めていた。

以上の DESD と GAP の取組を基礎として、2020年から2030年を対象とする新しい枠組み「持続可能な開発のための教育：SDGs 実現に向けて（ESD for 2030）」が2019年の第74回国連総会で承認された。本枠組みでは、ESD が SDGs の17のゴール全ての実現に貢献することを通じて、より公正で持続可能な世界を構築することを目指すことを目的としている¹。

さらに本実施計画では、5つの優先行動分野における各ステークホルダーのコミットメントに資する計画が次の通り明記された。

- ①政策の推進（ESD の政策への取り込み）
- ②学習環境の変革（機関包括型アプローチの実施）
- ③教育者の能力構築（ESD を実践する教育者の育成）
- ④ユースのエンパワーメントと参加の奨励（ESD を通じて持続可能な開発のための変革を進める若者の参加の支援）
- ⑤地域レベルでの活動の促進（ESD を通じた持続可能

な地域づくりの促進)ⁱⁱ

本稿では、実施計画の5つの優先行動分野の②学習環境の変革と⑤地域レベルでの活動の促進に資することを目的に、古都奈良の文化財の建立や復興、継承、そのための人々の営みについての研究により抽出した共通点や相違点を明らかにし、SDGsについて学ぶことができる教育旅行について提案する。

2. 先行研究について

2015年9月の国連持続可能な開発サミットにおいて「我々の世界を変革する／持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されて以来、アジェンダの中心であるSDGsに関する研究が一気に過熱した。

開発教育の第一人者である田中(2003)は、ESDとは、①生態系や環境保護を中心とした従来の環境教育、②人口、貧困、健康といった開発問題を扱う開発教育、③平和、人権、民主主義、共生といった平和教育・人権教育の三つの柱によって成り立つ教育学習活動であると位置づけているⁱⁱⁱ。これらESDに関連する教育とSDGsの関連についての研究を概観する。

まず環境教育とSDGsとの関連についてである。市川(2017)はSDGsの17の目標について、環境教育として取り組んでいくときには、人間による環境への負荷とその低減、人間と環境の関わりやつながりと動植物との共存・共生について、一人一人の身近な環境を出発点として学習していくことが重要であると述べている^{iv}。つまり、SDGsの目標12、13、14、15を学習の出発点として想定していると思われる。次に開発教育とSDGsの関連については、開発教育の第一人者である田中(2016)は、SDGsは2000年から2015年までの目標であったミレニアム開発目標(以下、MDGs)と地球温暖化、生物多様性、水資源などの持続可能な開発に関わる目標の2つの柱で構成されていると述べ^v、地域と世界を結びつけて課題を理解し、解決策を考えていくような学習活動の必要性から開発教育協会が推進してきた参加型学習の有効性を指摘する。また、平和教育・人権教育とSDGsとの関連については、ESDを研究する中澤(2022)が、第73回全国人権・同和教育研究大会特別分科会での講演において、SDGsの前文より、SDGsがあくまで人間中心であり、環境保全も人間の命に係わ

る生態系サービスの維持を目的としていることから、人間社会の持続を目標とするSDGsは生まれながらもつ権利である人権と同じであり、持続可能な開発(以下、SD)の推進は人権啓発活動と、ESDは人権教育とそれぞれ同義であると述べている(図1)。

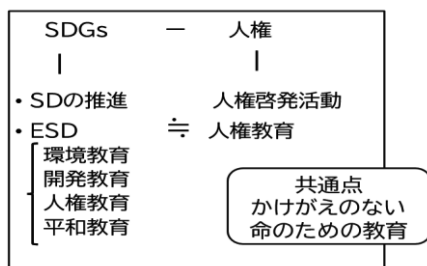
SDに関しては、田中(2019)は、SDGsとまちづくりについて、まちづくりに最も関連したSDGsの目標は11であるが、住民の生活あるいは自治体行政に関わる目標は、保健、教育、産業、環境などSDGsのすべての目標と関連してくると指摘し、SDGsの特徴である経済、社会、環境の三側面のバランスのとれた発展は、まちづくりにおいて重要な原則であり、SDGsのすべての目標がまちづくりと深く関連していると述べている^{vi}。また、SDGsの達成をエネルギー分野での技術革新から研究する田島(2020)は、バイオマスでの水素製造による持続可能なエネルギー供給を、SDGsの目標7、9、13の対応策として紹介している^{vii}。さらに、古沢(2020)は、持続可能な社会のトータルビジョンとして、第1次産業を中核とする有機循環の構築、ヒューマンスケールの相互信頼可能な関係性に基づく地域連携の深まりと生命の持続可能性を基礎とする循環型社会の形成を示している^{viii}。

以上のことから、SDGsに関する教育は、目標の達成に自ら取り組むことができる人材の育成を目的としており、環境問題、命に関わる社会問題、人権・平和といった、人間が生き残る確率を高めるための教育であり、地域課題といった身近な課題とSDGsといったグローバルな課題を結びつけることで、目標達成への意欲を向上させる教育活動であることがわかる。また、SDについては、持続可能なまちづくりの観点からの新しいシステムの導入の重要性、エネルギー問題や食料問題の解決といった、人類社会の根幹にかかわる課題における技術革新の重要性が指摘されている。

一方、文化遺産とSDGsの関連については、管見する限り、田淵(2009)が世界遺産とESDの関連について述べた他、中澤(2021)が歴史文化遺産と持続可能な社会づくりの必須要件について述べたものだけである。

田淵は世界遺産教育を、知識の獲得が中心となる世界遺産についての教育、世界遺産の保護・保全に対する態度形成といったモラルの教育としての世界遺産のための教育、世界遺産を切り口としたESDとしての世界遺産を通しての教育に分類し、「負の遺産」と「危機遺産」の教材化を勧めている^{ix}。

中澤は古都奈良の文化財が1300年間にわたって受け継がれていることに着目し、持続可能な社会づくりへのヒントがあるに違いないと考えた。そして古都奈良の文化財の建立に関わって国際協力と技術革新の重要性、受け継ぐための新しいシステムの導入、市民の参加の3つを持続可能な社会づくりの必須要素として抽出している^x。



(図1) SDGsと人権の関係(筆者作成)

本稿では上述した田淵と中澤の概念的枠組みを基盤に、古都奈良の文化財のもつ価値についてSDGsの観点からの捉え直しに取り組んだ。

3. 研究の方法

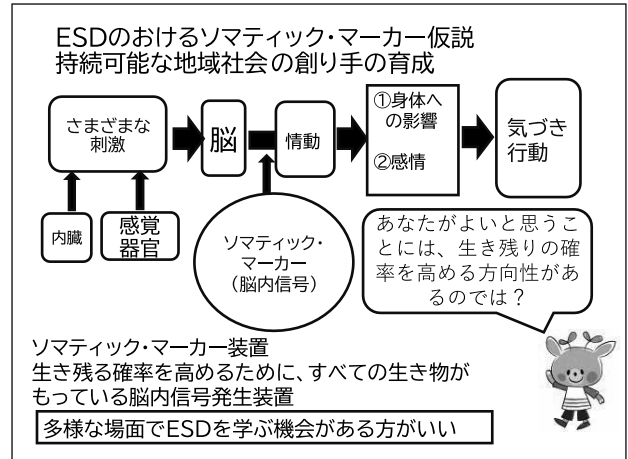
筆者はこれまで、小中学校における総合的な学習の時間での地域学習の教材開発を目的に、古都奈良の文化財等の歴史文化遺産の研究を行ってきた。古都奈良の文化財は、1998年に世界遺産として登録された。東大寺、興福寺、春日大社、春日山原始林、元興寺、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡の8つの資産から構成される世界文化遺産である。

古都奈良の文化財のうち平城宮跡を除く、7つの資産は1300年間にわたり継承されている。平城宮跡は長岡京遷都にともない田畑にもどり、明治時代に棚田嘉十郎や溝部文四郎らによる大極殿址の再発見まで、その場所も不明であった。一方、平城宮跡を除く7つの構成資産は1300年間にわたり受け継がれていることから、この2つを対比することで、持続可能な社会づくりの必須要素が抽出されるに違いないと考え、ESD教材としての開発に取り組んだ。

この研究においては、古都奈良の文化財を2つの方向から価値づけた。1つは古都奈良の文化財とソマティック・マーカースの関係性であり、もう1つはGAPとの関係性である。そしてSDGsについて学び、行動の変革を促すESD教材として整理した。

3.1. ソマティック・マーカース仮説の援用

2015年に国連持続可能な開発サミットにおいて採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」に含まれているのがSDGsである。アジェンダの前文に「このアジェンダは、人間、地球及び繁栄のための行動計画である。」と述べられているが、この「繁栄のための」という文言には違和感を覚える。前文の後に5つのPが続いている。5つのPとは人間 (People)、地球 (Planet)、繁栄 (Priority)、平和 (Peace)、パートナーシップ (Partnership) である。この内、人間 (People) に該当する目標は、目標1 (貧困をなくそう)、目標2 (飢餓をゼロに)、目標3 (すべての人に健康と福祉を)、目標4 (質の高い教育をみんなに)、目標5 (ジェンダー平等を実現しよう)、目標6 (安全な水とトイレを世界中に) であり、これらは、途上国の人々の生活改善を目標としていたミレニアム開発目標が達成できなかった項目であり、繁栄のための行動計画という言葉とはなじまない。また、地球 (Planet) に該当する目標である目標13 (気候変動に具体的対策を)、目標14 (海の豊かさを守ろう)、目標15 (陸の豊かさを守ろう)、さらに平和に該当する目標16 (平和と公正をすべての人に) も、繁栄のための行動計画という



(図2) ソマティック・マーカース仮説 (筆者作成)

よりは、人間という種の生き残りの確率を高めるために不可欠な要素を表していると考えらるべきであろう。

アメリカの脳科学者であるアントニオ・R・ダマシオはこの生き残りの確率を高めるために、すべての生物の脳にソマティック・マーカース装置が備わっていると主張する^{xi} (図2)。ダマシオは、我々の脳は目や鼻、口、耳、皮膚などの感覚器官や内臓などから24時間ずっと刺激を受けているが、特定の刺激に対してはソマティック・マーカースと呼ばれる脳内信号が発せられ、それが身体と心に影響することで、気づきや行動化を促すと指摘する。そしてこの特定の刺激とは、近づく敵を察知したり、エサや水のありかを予想したりといった刺激であり、生き残る確率を高めるために全ての生き物の脳にソマティック・マーカースを発する機能が備わっていると述べる。

筆者はダマシオのソマティック・マーカース仮説を自己の心に当てはめて考えた。例えば、東大寺の大仏様の建立や復興に関する話はとても感動的で、何度聞いても「いい」話であると感じている。家族や友達、同僚などの周囲の人々も異口同音に大仏様の建立や復興を「いい」話であると捉えている。なぜ多くの人が「いい」話であると感じるのであろうか。同じような感性を持つ一部の人が「いい」話であると感じる場合は多くある。しかし、ほとんどの人が「いい」話であると感じるのは理由があるはずである。ここにソマティック・マーカース仮説を援用すると、それが人間の生き残りの確率を高める内容であるということになる。多くの人の脳内でポジティブ信号が発せられるためであると考えた。つまり、多くの人が「いい」話であると感じるのは、その内容が人間の生き残る確率を高めることにつながるものであると捉え直した。

そこでまず、古都奈良の文化財に関する「いい」話を収集し、それと持続可能な社会の創り手に育てたい価値観との関連を考えた。ESDは学習者の社会づくりに関する価値観と行動の変革を促す教育であり、そこで育てたい価値観について、2005年にユネスコが提案した

ESD 国際実施計画案には、次の4つが示されていた。

- ①世代間の公正を重要視する価値観
- ②世代内の公正を重要視する価値観
- ③自然環境、生態系の保全を重視する価値観
- ④人権・文化を尊重する価値観

これらは次の2つに整理可能である。

- ⑤自然環境、生態系の保全に関して、世代間・世代内の公正を重要視する価値観
- ⑥人権・文化を尊重に関して、世代間・世代内の公正を重視する価値観

さらにSDGsがMDGsの後継プログラムであり、梶尾(2020)がSDGsは自律的に選択し、参加する主体としてのwell-beingへと人をもたらず国家による援助の形であると述べている³³ことから、単に生き残るだけでなく、⑦幸福であることを重要視する価値観を付け加える。

そして収集した古都奈良の文化財の多くの人が「いい」と感じる内容を、このESDで育てたい⑤・⑥・⑦の価値観に関連付けることで、古都奈良の文化財の価値を人間の生き残る確率を高める視点から明らかにする。

3.2. GAPを活用した重要ポイントの整理

筆者は奈良市教育委員会事務局に在職中に、田淵の世界遺産教育の3つの概念的枠組を援用し、世界遺産学習の再構築に取り組んだ。1998年の古都奈良の文化財の世界遺産登録を受け、2001年度に始められた奈良市教育委員会の世界遺産学習は、世界遺産を巡ることに主眼が置かれていた。これを「世界遺産を通したESD」につくりかえ、世界遺産学習の目標として次の3つを掲げた。

- ・奈良のよさを深く理解し、奈良に愛着を感じ、奈良を誇りに思う子どもを育てる。
- ・文化遺産の創造や継承、またその保護、文化遺産を取り巻く自然環境の維持に、長い年代を通じて取り組んできた人々の思いや努力を共感的に理解し、文化遺産や自然遺産を尊重する態度を育てる。
- ・奈良の文化財や自分の生活を空間的また歴史的に捉えなおし、国際理解や環境、平和・人権等の現代的な諸課題について意欲的に学ぶ力を育てる。

以上は2008年6月に奈良市教育委員会事務局学校教育課発行のリーフレット「人が好き、まちが好き、奈良大好き世界遺産学習」に記載された世界遺産学習の目標である。当初は意気込んで作成したつもりであったが、学習者の価値観と行動の変革を促すというESDの目的から捉えなおすと、目標の文末が「子どもを育てる」「態度を育てる」「学ぶ力を育てる」となっており、行動の変革を促す内容にはなっていないことに気付かされた。ぼんやりとしたイメージではなく、行動化への意思決定や具体的な行動化に結び付ける必要がある。

この反省から、明確な行動の変革を促す目的で、古都奈良の文化財を「SDGsを学ぶ教材」として開発するた

めに参考にしたのが、前掲の第2期ESD国内実施計画に記載されたGAPの解説である。GAPでは、「持続可能な開発は、政治的合意、財政的な動機付け、技術的な手段のみによって実現できるものではなく、一人一人の考え方や、社会に働きかける等の行動の変容が求められるもの」とであると指摘する。本稿では、ここに示された4つの視点、a政治的な合意、b財政的な動機付け、c技術的な手段、d一人一人の行動変容で古都奈良の文化財を捉える。古都奈良の文化財は、平城宮跡以外の構成資産は1300年間にわたり受け継がれており、持続可能な要素が内包されていると考えられる。平城宮跡とそれ以外の構成資産をこの4つの視点で比較することで、4つの視点の中でも特に重要なものを明らかにする。

2030アジェンダが採択され、17の目標がSDGsとして示された。17の目標は、持続可能な社会を実現するためのアプローチの入り口を示しており、一人一人が自分にできるアプローチ方法において、持続可能な社会づくりに貢献することが求められる。古都奈良の文化財を「SDGsを学ぶ教材」として捉えなおすために、特に重要視されるポイントを明らかにすることは、具体的な参加・行動化を促す上で重要であると考えた。

4. 古都奈良の文化財が内包するESDの価値観

古都奈良の文化財に関して多くの人が「いい」話であると感じる内容を収集し、ESDで育てたい価値観と関連付けたのが(表1)である。

以上のように、古都奈良の文化財には、ESDで育てたい価値観が内包されている。特に東大寺と唐招提寺には価値観⑤・⑥・⑦のすべてが内包されていることから、多面的な教材開発が期待できる。

一例として唐招提寺に内包されるESDの価値観を紹介する。奈良時代にはさまざまな人流により、すでに仏教が伝わっていたが、戒律を伴った正しい仏教を日本に根付かせるために、興福寺の榮叡と普照が遣唐使船で中国に派遣された。2人は中国に渡って9年目に揚州大明寺で鑑真に出会い、鑑真の多くの弟子の誰かに日本に来てもらえるよう依頼したが、誰も行きたいと言わなかった。すると、鑑真は「仏法のためなり。なんぞ身命を惜しむることあらんや。諸人行かずんば、我すなわち行くのみ。」と述べ、5回の渡航失敗の後、6回目に遣唐使船で来日し、唐招提寺を開いた。この鑑真の言葉と行動には、⑥世代間・世代内において、人権・文化を尊重する価値観及び⑦日本人が正しい仏教にふれることで幸福になることを重要視する価値観が内包されていると言えるだろう。

次に鎌倉時代の唐招提寺の中興の祖と言われる覚盛のエピソードを紹介する。覚盛がお経を唱えている周りにやぶ蚊がいるのを見て、弟子がやぶ蚊をたたこうとしたとき、やぶ蚊に血を与えるのも供養であるとして、殺生

(表1) 古都奈良の文化財が内包する ESD の価値観

文化遺産	収集した概要	ESD の価値観
東大寺	盧舎那仏造願の詔に示された大仏建立の理由と人々の対応	⑤⑥⑦
東大寺	重源上人・公慶上人による大仏復興	⑥⑦
東大寺	修二会	⑤⑥⑦
興福寺	八部衆像・釈迦の十大弟子像	⑥
春日大社	おん祭、南都楽所	⑤⑥
春日山原始林	841年：禁猟、禁伐の詔	⑤
元興寺	行基葺きの瓦、内陣	⑥⑦
薬師寺	薬師如来坐像の台座、百万巻写経勸進	⑥⑦
唐招提寺	鑑真の渡来、覚盛とうちわまき、釈迦如来立像	⑤⑥⑦
平城宮跡	棚田嘉十郎、溝部文四郎	⑥

※ESD の価値観の記号の内容は次の通り

- ⑤自然環境、生態系の保全に関して、世代間・世代内の公正を重要視する価値観
- ⑥人権・文化を尊重に関して、世代間・世代内の公正を重視する価値観
- ⑦幸福であることを重要視する価値観。

を禁じた。覚盛はまた、女性の受戒制度を整え、尼僧になる道を切り開いたのであるが、覚盛の葬式の際、法華寺の尼僧たちが、せめてやぶ蚊をはらってくださいと、ハート形のうちわを供えたのが、唐招提寺のうちわまきの起源である。また、鎌倉時代に建立された清凉寺式の釈迦如来立像には胎内物があり、そこには「必ず必ず、これらの衆生より始めて一切衆生、皆々、仏となさせ給え」とあり、多くの人名に交じってクモ、ノミ、シラミ、ムカデなどの名前が記されている。これらのエピソードには、⑤世代間・世代内において、自然環境、生態系の保全を重要視する価値観、及び⑦幸福であることを重要視する価値観が内包されていると言えるだろう。

5. GAP の4つの視点による検討

GAP が示す a 政治的な合意、b 財政的な動機付け、c 技術的な手段、d 一人一人の行動変容の4つの視点で古都奈良の文化財を検討する。特に継承できなかった平城宮跡と現在も継承されているそのほかの構成資産を比較することで、4つの視点の中でも重要な視点が指摘できると考え、(表2)に整理した。(表1)で抽出した古都奈良の各文化財の概要をGAPの4つの視点で検討した。

以上の検討から明らかになったことは、興福寺と平城宮跡をのぞく資産にはd一人一人の行動変容が見られ

(表2) GAP の4つの視点で検討した古都奈良の文化財

文化遺産	収集した概要	GAP の視点
東大寺	盧舎那仏造願の詔に示された大仏建立の理由と人々の対応	abcd
東大寺	重源上人・公慶上人による大仏復興	ad
東大寺	修二会	abd
興福寺	八部衆像・釈迦の十大弟子像	ab
春日大社	おん祭、南都楽所	abd
春日山原始林	841年：禁猟、禁伐の詔	ad
元興寺	行基葺きの瓦、内陣	d
薬師寺	薬師如来坐像の台座、百万巻写経勸進	d
唐招提寺	鑑真の渡来、覚盛とうちわまき、釈迦如来立像	ad
平城宮跡	棚田嘉十郎、溝部文四郎	abc

※GAP の4つの視点は次のとおり

- a：政治的な合意
- b：財政的な動機付け
- c：技術的な手段
- d：一人一人の行動変容

るということである。

東大寺大仏の建立・復興には多くの国民がボランティアで労働力を提供したり、寄付を行ったりしている。修二会では、お松明の竹やフジづる、燈明油や芯、和紙などさまざまな材料が必要とされるが、それぞれ全国から集めることができるシステムが構築されている。春日大社のおん祭は大和一国の祭として捉えられ、例えば、春日若宮を遷すお旅所のお仮殿をつくるには、「南都神事の御殿松」と呼ばれる松の木が毎年1798本必要なのだが、木の運搬が困難な吉野郡を除く大和14郡には、何年かごとに順番で村の石高百石につき中木5本を出すルールがあり、奈良の人全員が関わる祭とされていた²¹。春日山原始林は841年に禁猟・禁伐の詔が出されたが、奈良の人々はそのルールを1000年以上にわたって守り続けた結果として、春日山は原始性が保たれてきた。春日山原始林は人口密集地である奈良町にも近いことから、ルールが順守されていなければ、はげ山になっていた可能性もある。元興寺は、蘇我馬子が明日香村に日本で最初の仏教寺院として建立した法興寺が718年に移って以来、名前を元興寺と改めたものである。元興寺のスポンサーであった蘇我氏は乙巳の変で滅びている。つまり、奈良に移ってきた元興寺には有力なスポンサーが不在であった。その元興寺には奈良時代に頼光と智光という2人の学僧がおられたが、頼光が先に亡くなってしまふ。ある日智光は頼光が極楽浄土で楽しく暮らしている夢を見、板絵に表した。智光曼荼羅である。やがて智光

も亡くなるのであるが、智光も頼光も元興寺から浄土に旅立ったことから、元興寺の内陣こそが極楽浄土の入り口であるという信仰が広がり、名もなき庶民によって支えられてきたのが元興寺である。薬師寺は兵火等により、奈良時代の建造物として残っているのは東塔だけであり、境内は荒れていた。昭和になって住職となった高田好胤氏は白鳳伽藍を再建するために、百万巻写経勸進に取り組んだ。金堂再建のためには10億円の費用が必要であったが、高田好胤氏は人々に写経していただき、納経料として納めていただく1000円を蓄積して金堂再建費にする運動を始めた。1000円の納経料で10億円集めるには、百万巻の写経が必要である。当初は無謀な計画だと思われていたが、1976年に、その費用で金堂を再建しただけでなく、現在も多くの人が写経勸進を続けられている。唐招提寺については、釈迦如来立像の胎内物を紹介したが、多くの庶民が造仏に関わっている。

このように、古都奈良の文化財の建立や継続に関わってボランティアによる労働力の提供や寄付など、d一人一人の行動変容があったことがよくわかる。

一方、継承されなかった平城宮跡については、国家財政を傾けて建設された事実より、a政治的な合意とb財政的な動機付けについては申し分がない。また土地を切り拓き、唐の長安の都を模した碁盤の目のような道路を建設し、大極殿や朱雀門を建設した他、物流のために運河を掘削したり、運河の上に水洗トイレを設置するなど、c技術的な手段も駆使されたであろう。しかし、このような建設に携わったのは、班田収授の法による税として地方より集められた人々であり、山上憶良が当時の農民の暮らしを詠んだ「貧窮問答歌」から察するところ、自主的に建設工事に参加した人は少なかったのではないか。そのため、長岡京に遷都されると、それを維持しようということもなく、元の田畑に戻ってしまったのである。明らかにできていないのは、興福寺である。興福寺は藤原不比等によって明日香村から移された藤原氏の氏寺である。その継承に一般市民が関わったとは考えにくい。平安時代には僧兵がしばしば春日大社のご神木を掲げて都に強訴していた事実から、多くの僧兵を抱えていたということはあるだろう。興福寺が1300年間継承できた理由については、今後の研究課題としたい。

以上のことからGAPで示された4つの視点の中でも、d一人一人の行動変容が、持続可能な社会づくりにおいては特に重要であることが明らかになった。すでに古都奈良の文化財には、持続可能な社会の創り手に育てたい価値観が内包されていることは(表1)にみたとおりである。(表1)と(表2)をあわせて(表3)を作成した。

以上のことから、ESDの価値観⑤⑥⑦を内包し、かつGAPの4つの視点のうちdを内包する東大寺大仏に関わる盧舎那仏造頭の詔に示された大仏建立の理由と人々の対応、東大寺修二会に関わるストーリー及び唐招提寺の鑑真の渡来、覚盛とうちわまき、釈迦如来立像に

(表3) 古都奈良の文化財におけるESD教材としての重点ポイント(筆者作成)

文化遺産	ESDの価値観	GAPの4つの視点
東大寺	⑤⑥⑦	abcd
東大寺	⑥⑦	ad
東大寺	⑤⑥⑦	abd
興福寺	⑥	ab
春日大社	⑤⑥	abd
春日山原始林	⑤	ad
元興寺	⑥⑦	d
薬師寺	⑥⑦	d
唐招提寺	⑤⑥⑦	ad
平城宮跡	⑥	abc

まつわるストーリーは、ESD教材として価値が高いと言えるだろう。

6. 奈良SDGs学び旅の提案

奈良SDGs学び旅は、奈良商工会議所とソーシャル・サイエンス・ラボの依頼の下、奈良教育大学がシンクタンクとして「奈良新しい学び旅推進協議会」に参加してプログラム化した教育旅行である。

6.1. 意識化に重要な記憶の蓄積

検索エンジンで「だまし絵」と入力すると様々な画像が表れる。だまし絵は一見したところ見える画像が、別の角度から見ると、まったく違ったものに見えていく。目から入った光の信号は、確かに大脳皮質における視覚に関する領域である視覚野に映し出されているのだが、意識できないと見えていることを認知できないという特徴がある。そして無意識の状態から意識の状態に引き上げるのが記憶であると、脳科学者である鈴木(2020)は指摘している。先ほどソマティック・マーカーについて紹介したが、すべての生物に備わっている先天的なソマティック・マーカー装置とは異なり、教育や経験によって獲得される社会的なソマティック・マーカー装置については、気づきの繰り返しが必要なのである。鈴木は「ひらめきは突発的なものであり、試行を積み重ねて徐々に上達するような学習とは無縁であると考えられるかもしれないが、そうではない。無意識システムが試行を重ねる、つまり学習を行うにつれ徐々に洗練されていき、結果としてひらめきを生み出しているということになる。」と述べる^{xiv}。つまり持続可能な社会の創り手として、身の回りにある持続不可能な状況に気づくためには、多様なESDを学ぶ経験の蓄積が必要になるということである。

6. 2. 教育旅行において学ぶSDGs

様々な地方を旅行した経験のある人でも、修学旅行については、鮮明に記憶しているのではないだろうか。各学校段階における修学旅行は、一生に一度の記憶に残る旅である。この記憶に残りやすい教育旅行である修学旅行を、物見遊山の旅で終わらせるのではなく、持続可能な社会の創り手育成の一環として、SDGsに関する学びの記憶を蓄積する場面に活用するのが奈良SDGs学び旅である。

奈良SDGs学び旅では、まず、学び旅を申し込んできた学校と事前打ち合わせを行い、これまでのSDGsに関わる学習、つまりESDの経験についての情報を提供していただく。次に奈良でのフィールドワークの予定や見学場所についても情報提供していただき、講演内容についての打ち合わせを行う。新型コロナウイルスの感染拡大時には、オンラインでSDGsに関する講義を行っていたが、最近では旅行当日に奈良教育大学の講堂、あるいは近隣のホールで対面式による45分程度の講義を行っている。奈良への修学旅行では、どの学校も必ず東大寺大仏殿を拝観する。そこで、盧舎那仏造頭の詔の中で示されている大仏建立の理由である「乾坤あいやすらかに」と「動植ことごとく榮えむことを欲す」の2点をSDGsの目標と関連付けて説明する。また、多くの人々がボランティアで大仏建立に関わったことから、奈良時代の人々はよりよい社会を実現するために大仏を造ったが、SDGsの達成が求められている現在、みなさんは何をするつもりかを問い、大仏殿では心の中で大仏に約束するよう伝えている。

2022年度の4月から11月において実施した奈良SDGs学び旅の件数は(表4)の通りである。

(表4) 奈良SDGs学び旅の実施件数

対象月	小学校		中学校		高等学校	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	0	0	0	0	0	0
5月	0	0	4	594	0	0
6月	0	0	2	450	2	141
7月	0	0	1	103	1	39
8月	0	0	2	96	2	41
9月	1	55	1	24	0	0
10月	0	0	4	454	2	186
11月	1	99	2	237	3	251
合計	2	154	16	1958	10	658

7. まとめ

ESDは持続可能な社会の創り手を育成する教育であり、学習指導要領の改訂により、日本中のすべての幼稚園から高等学校において、ESDの理念を基盤とした教育活動を展開していくこととなった。また、その進め方としては、教科や総合的な学習の時間などの授業におい

て実施するだけでなく、給食や掃除、学級活動といった特別活動の時間、遠足や修学旅行といった学校行事の時間を含め、学校教育活動全般において実施することが求められている。

一方、2020年から2030年を対象とする新しい枠組として「持続可能な開発のための教育：SDGs実現に向けて(ESD for 2030)」が2019年の第74回国連総会で承認された。この枠組においては、ESDがSDGsの17のゴール全ての実現に貢献することを通じて、より公正で持続可能な世界を構築することを目的としている。

以上のことより、奈良での修学旅行を物見遊山の旅からSDGsを学ぶ旅に変換していくために、奈良への修学旅行の主な見学先である古都奈良の文化財が内包するSDGsとしての価値を、ESDで育てたい価値観とGAPで示された4つの視点で捉え直すことを試みた。

本研究から明らかになったことは2つある。第1に古都奈良の文化財を構成する8つの資産は、ESDで育てたい価値観を内包していることである。2つ目は、GAPが示す4つの視点の中で、平城宮跡とそのほかの構成資産との比較を通して、持続可能な社会づくりにおいて特に重要なことは、市民一人一人の行動の変容だということである。

以上の結果から、SDGsを学ぶ教材としてもっともふさわしいものは東大寺の大仏の建立に関わり、盧舎那仏造頭の詔に示された大仏建立の理由や人々の対応及び東大寺の修二会に関わるエピソード、また唐招提寺の鑑真の渡来、覚盛とうちわまき、釈迦如来立像に関するエピソードであると思われる。

今後、奈良新しい学び旅を体験した児童生徒が、地元に戻って持続可能な地域社会の創り手となることができるよう、フィールドワークにおいて、市民一人一人の行動の変容の跡を見出す視点を育てることができるよう、SDGs教材としての歴史文化遺産の活用について、研究を進めていきたい。

注

- i 我が国における「持続可能な開発のための教育(ESD)」に関する実施計画(第2期ESD国内実施計画):持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議(2021年),p.2
- ii 同上,pp.6-13
- iii 「持続可能な開発のための教育」とは何か:田中治彦(2003年),『持続可能な開発のための学び』,開発教育協会,p.16
- iv 環境教育の歴史と課題:市川智史,(2017年)『SDGsと環境教育』,学文社,p.17
- v 開発教育の歴史と課題:田中治彦,(2016年),『SDGsと開発教育』,学文社,p.15
- vi SDGsとまちづくり:田中治彦,(2019年),『SDGs

- とまちづくり』,学文社 ,pp10-12
- vii バイオマスでの水素製造がもたらす持続可能なエネルギー供給:田島正喜 (2020),『SDGsを考える』,ナカニシヤ出版 ,pp.85-98
- viii 食文化と農の尊厳性:古沢広祐 (2020),農文協 ,p.127
- ix 世界遺産教育とその可能性:田淵五十生 (2009),『国際理解教育』,国際理解教育学会 ,pp.97-101
- x 歴史文化遺産が語る持続可能な社会づくりの必須条件:中澤静男 (2021),『ESDの授業づくり』,京阪奈情報教育出版 ,pp28-32
- xi ソマティック・マーカー仮説:アントニオ・R・ダマシオ,田中三彦訳 (2000年),『生存する脳』,講談社 ,pp.270-279
- xii SDGsが目指す幸福度の向上:梶尾悠史 (2020年),『学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践』,協同出版 ,pp.9-12
- xiii 世界遺産古都奈良の文化財:岡本彰夫 (2012年),『学べる!世界遺産の本奈良』,京阪奈情報教育出版 ,pp.74-75
- xiv 創造(について)のバイアス:鈴木宏昭 (2020年),『認知バイアス』,講談社 ,p.181